Kwansei Gakuin University

——書　評——

Ian Steedman, *Marx after Sraffa*

London, NLB, 1977, 218 pp.

松　本　有　一

I

マルクス経済学にたいするピエロ・スラッファ（Piero Sraffa）の貢献にかんする論議の動向については，多くの研究者によって関心をもたれており，評者もいく度かの機会にその整理，展望を試みたことがある．今回ここで取りあげるのは，そのようななかで一つの明確な立場をとっている，イアン・スティードマン（Ian Steedman）の *Marx after Sraffa*（1977）である．本書の内容はその題名からおおよそのことをうかがえるのではないかと思われる．本書は最初，*A New Marxist Economics : Marxist categories in the light of the work of Piero Sraffa* というタイトルで出版を予告されていたが，結局は *Marx after Sraffa* となった．ここで "the work of Piero Sraffa" というのは，いうまでもなく，スラッファ『商品による商品の生産』[1] のことである．詳細は以下でのべるわけだが，簡単にいっておくと，スティードマンのネライは，（彼が考えるところの）スラッファ理論のわく組をもって，マルクス経済学——つまり『資本論』——の価値，価格および，とりわけ利潤率にかんする議論に代置させようというものである．

II

著者スティードマンについて簡単に紹介しておこう．彼は1941年 London に生まれ，

1) P. Sraffa, *Production of Commodities by Means of Commodities. Prelude to a Critique of Economic Theory*, Cambridge University Press, 1960（菱山泉・山下博訳『商品による商品の生産——経済理論批判序説』有斐閣，1962年）．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

Latimer Upper School, Cambridge 大学, Manchester 大学に学び，現在は Manchester 大学の経済学教授である．これまでの主な仕事は，資本理論論争にかんするもの，技術のリスウィッチング論の国際貿易理論への応用，そしてマルクス経済学（主に価値・価格論，転化問題，利潤論など）にかんするものである．また彼は，イギリスの左翼的ないしマルクス主義的経済学者の集まりである The Conference of Socialist Economists（1970年設立）の主要メンバーの一人であり，かつ *Cambridge Journal of Economics*（1977年創刊）の Associate Editors の一人でもある．

スティードマンは著書・論文を多くもっているが，ちなみに先にふれた The Conference of Socialist Economists の機関誌 *Bulletin of the Conference of Socialist Economists*（1971～1976, 1977年以降 *Capital & Class* と改題）に掲載された四つの論文名をあげておくことにする．[2)]

"An Expository Note on the Switching of Techniques", Autumn 72.

"Marx on the Rate of Profit", Winter 72.

"The Transformation Problem Again", Autumn 73.

"Fixed Capital and Value Analysis" (with G. Hodgson), June 75.

III

さて，*Marx after Sraffa*（以下本書と呼ぶ）の内容にはいっていくわけだが，はじめに全体のネライと構成をみておくことにしよう．すでにのべたように，本書の主要なネライは，マルクスの価値，価格および利潤率にかんする理論の根本的欠陥を批判するとともに，それに代わる接近方法をスラッファの著作を基礎にして提示することであった，といってよいだろう．

スティードマンが本書のなかで問題にしている6つの論点を簡単に要約しておくことにしよう（pp. 14～15）．[3)]

i）生産諸条件および実質賃金――双方とも諸商品の物的な量で明示されている――は

2）同誌は会員にのみ配布され一般には入手しにくかったのであるが，近くリプリント版が極東書店より出版されるということである．*Capital & Class* と改題後は会員外にも一般に販売されるようになった．

3）以下，本書からの引用個所，要約の当該個所の指示は，本文中にページ数のみを記す．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

利潤率（および生産価格）の決定に十分なものである．

ii）したがって，諸商品に体化されている労働量は利潤率（あるいは生産価格）の決定に本質的な役割を演じない．

iii）「転化問題」にかんするマルクスの解法は正しくない．それは生産価格という観点からでなく，より重要なことには利潤率という観点からである．競争的な資本主義経済において，利潤率や生産価格はなんら価値の大きさに関係なく（without referenec to any value magnitude）決定されるのであるから，「転化問題」は擬似問題（a pseudo problem）であり，妄想（a chimera）である．すなわち，剰余価値から利潤を導くとか，価値から生産価格が解かれるとかいう問題は存在しないのである．

iv）労働力の社会的配分はなんら価値の大きさに関係なく決定されうる．

v）剰余労働と利潤の存在との関係は，マルクスの価値概念には全く依存することなく確立することができる．

vi）利潤率の長期的運動にかんしてなんらかの予想をうちたてるためのアプリオリな基礎は存在しない．

ただし，ここに掲げた6つの論点はマルクスの理論にとって決定的な（crucial）ものではあるが，マルクスの理論がこれらの特定の論点に帰してしまうのではないことを，スティードマンは確認している．「マルクスの視野ははるかに広いものであった」（p. 15）．

スティードマンによれば，「マルクスは，他の偉大な理論家と同様，利潤率の分析を資本主義経済の運動（the workings）の首尾一貫した理解のための中心として見なしている」（p. 15）ということであるが，同時にスティードマンの主要関心を一点に限定させるとすれば，それは資本主義経済において利潤率を決定するものは何かということになる．利潤率を決定するものは何か――これはまさにイングランドの経済学に伝統的な最大の関心事である――ということが，本書の全体を貫く一本の赤い糸であるといっても過言ではないだろう．スティードマンが利潤率ということにいかに重きをおいているかということは，例えば本書の第2章から第5章にかんして，ここでは「資本主義経済における利潤率の決定の基本的事柄にかんする代替的議論を提示する」（p. 26）とのべられていることからも推測できるだろう．

ここで煩雑をいとわず，本書の章別タイトルを原文のまま掲げておくことにしよう．

Chapter 1. Principal Issues and Underlying Assumptions

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

Ian Steedman, *Marx after Sraffa*

Chapter 2. The 'Transformation Problem'

Chapter 3. Value, Price and Profit

Chapter 4. Value, Price and Profit Further Considered

Chapter 5. An Alternative Presentation—The Dated Labour Analysis

Chapter 6. Within the Labour Process

Chapter 7. Heterogeneous Labour

Chapter 8. Miscellanea

Chapter 9. A Falling Rate of Profit?

Chapter 10. Fixed Capital

Chapter 11. Positive Profits with Negative Surplus Value

Chapter 12. An Analysis of Fixed Capital and Joint Production

Chapter 13. The Determination of Labour Allocation

Chapter 14. Summary Statement and Implications

Appendix. Marx on Value, Money and Price

第1章では，先にあげた本書で議論される主要な問題が明らかにされ，議論の基本的前提がのべられる．第2章から第5章では，資本主義経済における利潤率の決定にかんする基本的な事柄について，マルクスの議論にとってかわる見解が提示されている．第6章から第8章は，第2章から第5章の議論の拡張である．そこでは，労働時間の増大，労働強度の増大，あるいは原材料の節約など労働過程内部での変化，異質労働の存在，差別賃金の存在，資本の回転期間の相違等々が利潤率の水準にあたえる影響が考察されている．第9章は利潤率の低下について論じられている．ここでスティードマンは，「利潤率の傾向的低下法則」に対する従来の批判の仕方は不適切であるとしているが，彼の結論は，利潤率の動きについて——少なくとも抽象的な議論においては——明確なことはいえないということである．ここまでの議論は，流動資本・単一生産物の諸産業を前提にしてなされている．

第10章から第13章では，固定資本が導入された場合，または結合生産の場合が考慮される．スティードマンの分析では，これらの場合にも，第2章から第8章までの「より単純な分析による発見にはほとんど影響しない」(p. 27) ということである．第14章では全体の要約とその含意がのべられる．付録では，価値，貨幣，価格にかんして『資本論』，『剰

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

余価値学説史』から合計32項目の長短の文言が抽出されている．

IV

本書の議論は前半（第2章～第8章）の流動資本・単一生産物の場合と後半（第10章～第13章）の固定資本・結合生産の場合に分けることができる．第8章「利潤率の低下？」は，それ自体検討すべき点が多くあると思われるが，この章は本書では挿論的位置にあり，またスティードマンも明確な結論を保留しているので，その検討は別稿に譲りたいと思う．また後半の議論は，スティードマンのもとの論文が発表されて以来，種々の論議をまきおこしていることもあるので，[4] 詳細な検討はこれもまた稿を改めて行ないたいと思う．したがって以下，単一生産物・流動資本の場合の価値，価格，利潤にかんするスティードマンの理論の検討が中心となる．

最初にスティードマンのマルクス批判からみることにしよう．「マルクス主義経済学者たちは，一つの本質的に重要でない問題，いわゆる『転化問題』の論議に多くの時間とエネルギーを消費してきた」(p. 29)．これまでの「転化問題」論というのは，費用価格（価値表示）をいかに生産価格化するのかということであったが，スティードマンの「主要な反対は，たとえ投入価格が転化されたとしても，マルクスの『解法』は内在的に首尾一貫しない」ということである（p. 29)．なぜなら利潤率計算は貨幣（価格）タームで行なわれなければならないが，マルクスは価値タームで行なっているからである．価値で計算した利潤率と価格で計算した利潤率は相違するがどちらが意味のあるものか？　「価値利潤率」に資本家は関心がないし，資本家はそれを知らない．資本家の諸決定や行動に影響を与え，競争経済において均等化される傾向にあるのは貨幣利潤率である．そして産業間での利潤率の均等化傾向は貨幣資本の移動によってもたらされるのである．利潤率は，粗産

4) 結合生産の場合，剰余価値が負であっても正の利潤の可能性があり，森嶋通夫のいう「マルクスの基本定理」は必ずしも成立しないというスティードマンの問題提起以来，種々の論議がまきおこっている．cf. I. Steedman, "Positive Profits with Negative Surplus Value", *Economic Journal*, Vol. 85, No. 337, March 1975（本書収録）．およびこれに対する M. Morishima, E. Wolfstetter のコメント（*Economic Journal*, Vol. 86, No. 343, September 1976, Vol. 86, No. 344, December 1976)，松田和久「結合生産物と負の投入労働量」『国民経済雑誌』第133巻第5号，昭和51年5月，置塩信雄「マルクスの基本命題――結合生産を考慮して」『国民経済雑誌』第134巻第1号，昭和51年7月など参照．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

出の価格から投入物の価格をひいたものを，投入物の価格で割ったものに等しく，この比率が粗産出の価値から投入物の価値をひいたものを，投入物の価値で割ったものに等しくあるべきだという理由は全くない．つまり，マルクスが考えたような S/(C+V)[5] は資本主義経済の利潤率ではないのである．以上のことは投入価格（費用価格）が転化さるべきか否かという問題とは全く独立なことであり，マルクスが投入価格を転化していないということはささいな問題（a minor problem）である．「マルクスの議論のより根本的な欠陥はその出発点にある．つまり，経済全体での利潤率を S/(C+V) に等しいとしたところにあるのである」(p. 44).

以上がスティードマンのマルクス批判であり，彼の議論の問題意識の出発点であるといえよう．『資本論』における価値論と生産価格論の不整合性（第1巻と第3巻の矛盾）は，ベーム-バヴェルク（E. von Böhm-Bawerk）が『資本論』第3巻の刊行＝「マルクス体系の完結」によせた論文[6]で指摘されて以来，くり返しいわれてきているものである．しかしこの批判は，諸商品の交換関係にかんして価値——もちろん，投下労働量にのみ規定された，という意味での価値であるが——にもとづく交換と，生産価格にもとづく交換とで，いずれが自由競争の支配する発達した資本主義経済において妥当かという観点からもっぱらなされてきた．もちろん生産価格の成立は利潤率の均等化傾向・平均利潤率の形成と裏腹の関係にあるのだが，「転化問題」論争においても利潤率計算の妥当性，利潤率を規定する要因の解明という面からのマルクスのアプローチの適否の検討はほとんどなかったように思われる．[7]

評者もかつて「価値の生産価格への転化」の問題点を論じ，現行『資本論』体系の不整

---

5) S, V, C はそれぞれ剰余価値，可変資本，不変資本．

6) E. von Böhm-Bawerk, "Zum Abschluss des Marxschen Systems", 1896（木本幸造訳『マルクス体系の終結』未来社，1969年）.

7) マルクスは利潤率計算を全部門を単純に集計して行なっているが，ボルトキェーヴィチは，奢侈財部門は利潤率の水準に影響しないことを明らかにした．L. von Bortkewicz, "Zur Berichtigung der grundlegenden theoretischen Konstruktion von Marx im dritten Band des ,,Kapital'", *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, Bd. 34, 1907. 価値の生産価格への転化は，本来平均利潤率の形成と密接に関連しており，価値と生産価値の乖離のみを云々するこれまでの議論は奇妙なこととも思える．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

合について触れ，労働価値説とは何か，価値法則とは何か，ということを問い直す必要性をのべたが，[8] スティードマンは単に『資本論』を解釈し直すのではなく，積極的にその理論的わく組の変更を求めたのである．しかも，その改変されたわく組のなかで，マルクスが『資本論』で行なった資本主義的生産における価値，価格，利潤の基本的分析と同様の結果が得られると考えるのである．

V

それではつぎに価値，価格および利潤にかんするスティードマンの議論をみることにしよう．第3章では数値例が用いられ，第4章では同様のことが一般的な形で示されている．スティードマンの想定する経済は，まず第一に「十分に発達した資本主義的商品経済」(p. 16) である．生産は資本家の所有する生産手段と「二重の意味で自由 (double freedom)」な労働者によって行なわれる．生産過程は「物的に明示された投入，労働時間の量，および物的に明示された産出」(p. 17) によって特徴づけられており，自己再生産の状態に (in a self-reproducing state) ある．すべての労働は不熟練「単純」労働で等しい能力と等しい「強度」にある．どの労働者もあらゆる種類の「具体的」労働を行なうことができる．労働時間の合計はすべて抽象的労働の量の合計である．「これまでのべてきた諸前提は，必然的に，価値の大きさ (the magnitude of value) は体化された労働時間の量 (a quantity of embodied labour-time) であるということを伴っているのである」(p. 20)．商品交換は貨幣を媒介にして行なわれると考えられているが，貨幣は明示的に取りあつかわれることはない．価格というときには常に生産価格のことであり，市場価格は考察されていない．賃金は特定の商品束で (in terms of a specified bundle of commodities) 外生的に決定されていて，分析の便宜上，あるときには前払いであったり，またあるときには後払いであったりする．[9]

以上の基本的諸前提のもとでスティードマンが提示しているモデルを一般的な形で示す

---

8) 松本有一「『価値の生産価格への転化』の問題点」『経済学雑誌』第76巻第6号，1977年6月．

9) スティードマンは前払いと後払いを較べて，実際には1年間の生産期間で賃金が週給で毎週支払われているならば，生産期間の後に全賃金が支払われるとする場合のほうがわずかに良い近似を与えることを示している (pp. 103～105)．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

と次のようになる（第4章）.

$$(1+\mathrm{r})(p^{\mathrm{m}}\mathrm{A}+\mathrm{m}a)=p^{\mathrm{m}} \tag{1}$$

Aは「生産された生産手段の行列」，a は「各産業の雇用水準をあらわす行ベクトル」でそれぞれ各商品の粗産出が1になるように単位が選ばれている．rは利潤率を，p^{m} は行ベクトルで貨幣価格を，mは貨幣賃金率をあらわす.[10] 上の式を変形すると，

$$p^{\mathrm{m}}=\mathrm{m}(1+\mathrm{r})a[\mathrm{I}-(1+\mathrm{r})\mathrm{A}]^{-1} \tag{2}$$

ここで労働者全体の得る実質賃金束（real wage bundle）を列ベクトルwで，総雇用量（ベクトルaの要素の合計）をLであらわすと，

$$\mathrm{mL}=p^{\mathrm{m}}\cdot w \tag{3}$$

(2)と(3)から

$$\mathrm{L}=(1+\mathrm{r})a[\mathrm{I}-(1+\mathrm{r})\mathrm{A}]^{-1}w \tag{4}$$

この式で，L，a，A およびwは既知で，唯一の未知数はrである．したがって「利潤率は生産の物的諸条件（the physical conditions of production）をあらわす A，a と L，および労働者の実質賃金 w によって決定されるのである（このとき価格 p^{m} も何らかの与えられた貨幣賃金率mにたいして，(2)から同じデータで決定される）」(p. 52).[11]

価値，剰余価値はつぎのようにして得られる．行ベクトル l が，「種々の商品の価値，すなわち種々の商品に体化されている社会的に必要な総労働時間」をあらわすものとすると，

$$l\mathrm{A}+a=l$$

であり

$$l=a(\mathrm{I}-\mathrm{A})^{-1}$$

となる．労働力の総価値Vは，

10）数値例では，鉄，金，穀物の三部門で，そのうち金を貨幣とし，価格は金の物的1単位を基準にして測られている．なお，数値例は，白銀久紀「転化問題とスラッファ理論――I. スティードマンの所説を中心として」『経済評論』1979年2月号に紹介されている．

11）利潤率が生産の物的条件と実質賃金によって決まるということは $(1+\mathrm{r})^{-1}$ が $(\mathrm{A}+\mathrm{L}^{-1}w\cdot a)$ のペロン-フロベニウス根に等しいということによっても示されている（pp. 52～53）.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

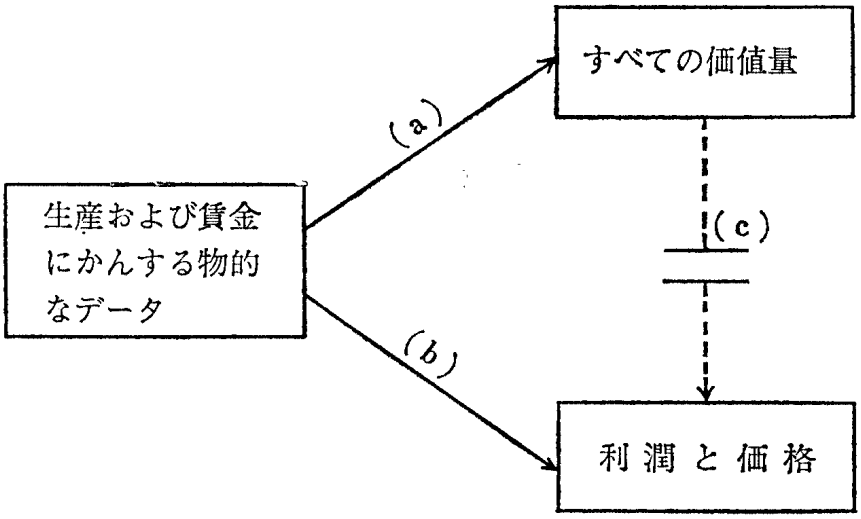
$$V = l \cdot w$$
$$= a(I-A)^{-1}w$$

総剰余価値Sは,

$$S = L - V$$
$$= [L - a(I-A)^{-1}w]$$

となる．また不変資本の総価値Cは lA の要素の合計に等しい．「このように l, V, S および C は生産条件と実質賃金によって決定される．実際，それらは他のいかなる方法によっても決定されえないのである」(p. 56).

以上，利潤率，生産価格，価値の決定にかんするスティードマンの議論を概観したが，それらの決定-被決定の因果関係が次のような図式（p. 48）で示されている．



「したがってわれわれは，『価値先端（value prong)』矢印(a)と『利潤-価格先端(profit-price prong)』矢印(b)とをそなえた『フォーク型の』特徴をもったものとして，われわれの理論的構造を図示しなければならないのである．一般に，一方の先端から他方の先端への道はない．おそらく強調されるべきことであるが，この結論は議論の論理的な結論である．もしだれかがこの結論にチャレンジしようとするならば，この者は議論の論理的な欠陥を見いだすことによってか，それともこの結論がもとづいているところの諸前提のうち一つかそれ以上のものを明示的にかつ首尾一貫して拒否することによってチャレンジしな

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ければならない．この結論に対して，たとえば，単にマルクスの結論と異なっているということによってチャレンジすることはできないし，あるいはこの結論が政治的，イデオロギー的に『受容できない』と――それが正しかろうが間違っていようが――主張することによってチャレンジすることもできないのである」(p. 49)．これが価値，価格，利潤にかんするスティードマンの基本的な考え方である．

マルクスは，価格は経済世界の表面にあらわれる現象的カテゴリーであって，その内奥に価値という根源的なカテゴリーが存在すると考えた．価値は，論理的にも歴史的にも価格に先行し，価値にもとづかない利潤率や価格は空虚である，というのである．したがってマルクスの場合，そして現行『資本論』体系を擁護しようとするとき，価値の生産価格への転化は一つの重要な課題となるのである．価値から出発して，論理的に矛盾や不整合がなく生産価格を説明する．これに対して価値→利潤率・価格は論理整合的に説明できないというスティードマンの批判はすでにのべたとおりである．スティードマン自身の積極的議論は物的データ（physical data）が出発点である．生産方法（＝生産技術）と実質賃金にかんする物的データが与えられれば，そこから利潤率，諸商品の価格，諸商品の価値が全く別々に得られるというのであった．しかも複数の代替的生産方法が存在し，技術選択の可能性がある場合には，技術選択は利潤率を基準として可能な最大利潤率が得られるように行なわれるのであるから，実際に選択され稼動される生産方法下での価値諸量(総不変資本，総可変資本など）を事前に知ることはできないというのである（pp. 64～65)[12]．「利潤率の決定は，このように，価値の大いさのいかなる決定に対しても論理的に先行するのである」(p. 65)．

さて，このようなスティードマンの論議に対して，それが『資本論』の展開と根本的に異なっていることでとやかくいうつもりはないし，その必要もない．だが，価値，価格，利潤率の関係で明確にしておかなければならない点はある．その最大のものは，スティードマンが「価値法則」をどのようにとらえているか，ということであろう．彼は，エルネスト・マンデル（E. Mandel）を引用して自身の「価値法則」観をのべている（pp. 197～

12) 生産物1単位あたりの価値は技術的生産方法から決まるが，各部門の生産規模が決まらないと不変資本価値総量，可変資本価値総量などはわからない．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

198)[18]．要約するとつぎのようになる．すなわち，「価値法則」は三重の機能（a triple function）をはたしている．1.「価値法則」は，諸商品の相対価格の長期的変化が振動するところの回転軸を確立する．2.「価値法則」は社会的総労働の配分の相対的割合を決定する．3.「価値法則」は平均利潤率を決定することによって経済成長を制御する．

マルクスは価値法則にかんして，ある個所で総括的にのべるということはしておらず，『資本論』その他の著作で，各々の議論のレベルにおいてそれに関連してのべているだけであるが，標準的な表現をすると，「価値法則とは<価値規定>を基礎にして，商品の生産と交換を規制する根本的法則である[14]」ということができる．ここで<価値規定>というのはいうまでもなく，商品の価値はその生産に社会的に必要な労働量によって規定されるということである．この「<価値規定>を基礎にして」というのを除けば，先のマンデル=スティードマンの「価値法則」はマルクスのそれと共通するといってよいであろう．そしてそのような「価値法則」は，その内容に則していえば，資本主義経済の基本的経済法則，といいかえてもよいだろう．とすれば，マルクスとスティードマンの相違は資本主義経済の運動法則を解明する際に「投下労働価値」が不可欠の分析用具かどうか，<価値規定>がなければ法則の解明ができないかどうかということになる．

これに対するスティードマンの立場は，くり返しのべているように，なんら価値に言及することなく資本主義経済の基本的運動法則の解明は可能であるということである．そしてさらには physical quantities approach のわく組のなかで『資本論』の諸問題――たとえば労働時間の延長，労働強度の増大，差別賃金の存在，賃金支払い方法の相違，流通資本の存在などが利潤率や剰余価値率に及ぼす影響――が考察されているのである（第6章～第8章）．しかもスティードマンの分析では，なんら価値にもとづかなくとも『資本論』と同様の結果が得られるというのである．

マルクスの分析方法と異なるからという理由だけでスティードマンを論難することは論外であるが，本書の議論ですべてが論じつくされているわけでもなく，問題点もある．スティーマドンは，本書に対して予想される異議申したてをつぎの7つに要約している（pp.

13) E. Mandel, "Introduction" to Karl Marx, *Capital*, Vol. I, Penguin Books, 1976, pp. 41～42.

14) 久留間鮫造ほか編『資本論辞典』青木書店，縮刷普及版，1968年，49ページ．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

22～23)[15].

a）スティードマンの議論は，非社会的で非歴史的であり，資本主義を特殊な生産様式としてとらえていない．

b）交換と分配にのみかかわり，生産過程にほとんど全く注意を払っていない．

c）生産過程が考察されるとしても，純粋に自然的技術的な事柄としてであり，社会的過程としてではない．

d）労働過程での資本家による強制，命令，管理や労働者の反抗は論じられていない．

e）蓄積，恐慌といった資本主義の動態はとりあつかわれていない．

f）量にのみかかわり，質の問題は全く排除されている．「価値」は単に体化された労働時間としてみられ，「価値の形態（form of value)」は全く無視されている．

g）利潤の源泉は説明されていないし，剰余労働，剰余価値という概念は無視されるか，拒否されている．

これらの「複合的」で「相互に関連した」(p. 22) 批判に対して，スティードマンは，これらは本書の基本的前提からすれば表面的なものであり，批判はあたらないと答えているが――事実，これらには本書の課題の外のものや本書で一応分析されている点も含まれている――，評者の眼から若干のコメントを与えておこう．

スティードマンの分析はもっぱら量にかんするもので，マルクスに対する批判も量の観点からであった．価値の問題でも，価値の量，価値の大いさの議論はあっても価値形態の意義（もしくは無意義）にかんしては全く言及されていない．価値形態論の有無が古典派の価値論とマルクスのそれとを区別する決定的な相違であるとするならば，価値形態論やそれにつづく物神性論，物象化論の展開――これらの重要性はスティードマンも認め，かつ彼のマルクス批判によってそれらが全く傷つくものでないとのべている[16]――が，スティードマンの当面の課題の圏外であっても，本書の理論的わく組からいかに可能か，どう関係するのか，その方向性なりとも示される必要があろう．そうでないと，彼のいうように，たとえ利潤の源泉が剰余労働，剰余価値にあるとしても (p. 57)，なぜ剰余労働が利

15) これは B. Fine, L. Harris, I. Gerstein, R. B. Rowthorn らが，スラッフィアンやネオ-リカーディアンに対して行なった批判を，スティードマンがまとめたもの．本書 p. 22, 脚注13参照．

16) "Marx's analysis of fetishism, reification and related matters is quite untouched by the Sraffa-based critique." (p. 206).

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

潤という形態をとって現象するのかの説明はできなくなるのではないだろうか．剰余労働という歴史貫通的に——少なくとも人々が生存水準以上の生産を行ない，拡大再生産が可能になって以来——存在してきたものが，資本主義的生産様式という特殊歴史的な社会においてなぜ利潤という形態をとってあらわれるのか説明する必要がある．現存の生産の技術的，社会的条件や実質賃金の水準は正の利潤をもたらすような状態にあるが，このような状態を規定する決定諸要素を明らかにすることが，なぜに対する答だとスティードマンは考えている（pp. 59 and 207）．彼はこれらの探求を本書の外においているが，本書から読みとれるかぎりでは，そこから得られるのは利潤率の高低を規定する要因とか搾取の度合の高低を規定する要因であっても，なぜに対する答が出てくるかどうかははなはだ疑問である．資本主義社会では，表面（流通）では「自由，平等，所有，ベンタム」が支配的に行なわれているのに対し，[17] 深部（生産）ではそれらがいかに転倒されているのか，深部での不等価交換が表面ではいかにして等価交換として転倒して現われるのか，このような資本主義の存立構造を明らかにしないかぎり，最終的になぜに答えることはできないだろう．それに答えることによって資本主義の特殊歴史的な性格をも把握することができるのではなかろうか．

スティードマンは，彼のマルクス批判は「問題の特定の範囲にのみ限定的な解決を与えるのであり」他の諸問題[18]の探求に影響しない，「一般的にいえば，かの批判は資本主義的生産様式の唯物論的説明を提示しようという企図をこわすものでもないし，特殊資本主義的社会構成の十分に明晰な社会的，政治的，経済的説明をうちたてる試みと少しも両立しないことはない」というのだが（p. 206），問題は両立のさせ方である．量と質といういい方をするならば，マルクスは量の面で欠陥を持っていた．スティードマンは質の面に全くふれていない．両者を二本立てに相対的に独立したものとするなら話は別だが，困難は両者を首尾一貫した論理で統一的，体系的に説くことであろう．

VI

スティードマンは，彼の議論は "the Sraffa-based critique of Marx" であり，"the

17）『資本論』第1部第2編第4章第3節．
18）たとえば，貨幣，有効需要，恐慌，集積，寡占，独占，国家の役割など（p. 206）．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

Sraffa "framework" にもとづくものであるというのであるが，マルクスとの関連はすでにのべたので，今度はスラッファの著作とスティードマンの議論との関連をみておくことにしよう．

まず最初に指摘しておかなければならないのは，スティードマンが本書のなかで，標準商品（Standard commodity）または標準体系（Standard system）に一言も言及していないことである．『商品による商品の生産』が論じられる場合，とりわけマルクス経済学との関係でそれがとりあげられるとき，その中心的論点は標準商品にかんするものであった．モーリス・ドッブ（M. H. Dobb）しかり，ロナルド・ミーク（R. L. Meek）しかりである．[19] 彼らは，マルクスの平均的資本構成の部門，あるいはその部門での生産物とスラッファの標準体系，標準商品の対応に注目していた．また，イートウェル（J. Eatwell）やパシネッティ（L. L. Pasinetti）は，標準体系を媒介することによって，価値と価格の関係すなわち「転化問題」が解決されると考えた．[20] スティードマンが価値と価格の対応関係に対して否定的見解をもっていることは，すでにみたとおりである（"The 'transformation problem' is a 'non-problem'" (p. 52)）．肯定的にしろ否定的にしろ，スラッファ理論の核心を標準体系，標準商品に見るという見解が大勢を占めている状況では——スティードマンの見解からすれば「転化問題」にたいして標準体系はなんの意義も持たないという答は予想されるが——やはり，標準商品，標準体系にたいする評価は示されるべきであろう．結局，本書から読みとれるかぎりでは，スティードマンのいう "Sraffa framework" とは，生産諸条件を物的量の関係で明示する physical quantities approach

19) M. Dobb, "An Epoch-making Book", *Labour Monthly*, October 1961, ditto, *Theories of Value and Distribution since Adam Smith. Ideology and Economic Theory*, Cambridge University Press, 1973, R. L. Meek, "Mr. Sraffa's Rehabilitation of Classical Economics" (1961) in his *Economics and Ideorogy and Other Essays——Studies in the Development of Economic Thought*, Chapman and Hall, 1967, ditto, "Introduction to the Second Edition" of his *Studies in the Labour Theory of Value*, Lawrence and Wishart, 1973, etc.

20) J. Eatwell, "Controversies in the Theory of Surplus Value : Old and New", *Science and Society*, Vol. XXXVIII, No. 3, Fall 1974, ditto, "Mr. Sraffa's Standard Commodity and the Rate of Exploitation", *Quarterly Journal of Economics*, Vol. LXXXIX, No. 4, November 1975, L. Pasinetti, *Lezioni di teoria della produzione*, Il Mulino, 1975 (*Lectures on the Theory of Production*, Macmillan, 1977)．両者の議論の問題点にかんしては，拙稿「スラッファ理論と転化問題——批判的考察」『経済学論究』第32巻第3号，1978年11月参照のこと．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

にすぎないといわざるをえない．だがもしそうだとしても，physical quantities approach はスラッファにその起源をもつのであろうか．スティードマンはスラッファのほかに自身の議論の先行者として，ボルトキェーヴィチ，ドミトリエフ（V. K. Dmitriev）はじめ数人の業績をあげている[21]．そして彼はつぎのように自問自答している．「'Marx after Dmitriev' または 'Marx after Bortkiewicz' がこの著作にふさわしいタイトルではないかと思われるかもしれない」，しかし *Marx after Sraffa* としたのは「スラッファの著作がドミトリエフやボルトキェーヴィチの先駆的業績を（重要ではあるが）特殊ケースとするような，厳密な分析のわく組を提示しており，一つのターニングポイントを印していることはすでに知られている」からである，と（p. 28）．

だが，physical quantities approach ということからでは，評者はドミトリエフやボルトキェーヴィチよりも，むしろレオンチェフ（W. W. Leontief）の産業関連分析をまず最初に思いうかべることができる．レオンチェフの分析は投入および産出の物的関係を明示的に確立し，生産量の分析に焦点をあわせたものであるが，そこに利潤率や価値関係をとりこむことにそれほどの困難はないと思われる．スラッファとレオンチェフが根本的に異ならないという見解すら存在する[22]．また，ドミトリエフ—ボルトキェーヴィチの流れの上にスラッファを位置づけるという考えもあるが[23]，労働価値から出発するか，物的データを出発点とするかということをきびしく峻別するスティードマンの立場からすれば，ドミトリエフやボルトキェーヴィチはむしろ前者の方に属するものとしなければ

---

21) 彼らのほかにつぎの人々の業績が掲げられている（pp. 27～28）．G. Abraham-Frois et E. Berrebi, A. Bródy, P. Garegnani, M. Lippi, M. Morishima, N. Okishio.

22) パシネッティはスラッファ理論への導入部分にレオンチェフの投入産出分析を置いている（Pasinetti, *op. cit.*）．またサミュエルソンは，「スラッファの分析装置やそれと同値のレオンチェフの分析装置（the Sraffa apparatus, or the equivalent Leontief apparatus）」といっている（P. A. Samuelson, "Understanding the Marxian Notion of Exploitation : A Summary of the So-Called Transformation Problem Between Marxian Values and Competitive Prices", *Journal of Economic Literature*, Vol. IX, No. 2, June 1971, pp. 417～418, 邦訳（白銀久紀訳）は伊藤誠・桜井毅・山口重克編訳『論争・転形問題』東京大学出版会，1978年所収）．評者は，スラッファとレオンチェフの外面的類似性は認めるが，両者の分析目的の相違とそこからくる「価値尺度」への認識の有無を強調したい．

23) M. Dobb, *Theories of Value and Distribution.*

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ならないだろう.[24]

スティードマンとスラッファの大きな違いの一つとして賃金のとりあつかいがある. スティードマンは賃金を終始, 物的に与えられたもの, real wage bundle として, 彼の分析のわく組の中では変化しないものとしている. これに対してスラッファは, 賃金を変化するものとして, 変数としてとりあつかっている. たんに利潤率や価格関係が生産諸条件と賃金に依存するというだけでなく, 賃金が変化するとき, それによって利潤率や価格関係——とりわけ後者——はどう変化するかという方にむしろスラッファの関心があった. だからこそ価格関係の変化とは独立な「価値尺度」はどのようなものか, それが満たすべき要件は何かという探求への道も開かれるのである. ただしより厳密にいうと, 生産方法と賃金が与えられれば, そこから利潤率が得られるというのはスラッファの議論の途中の段階である. 彼は最終的には利潤率は経済の制度的要因に依存して決まり, それによって価格関係と賃金率が決まると考えているのである.[25] なぜスラッファがこのような手続きをとったのかというと, それは標準商品の導出過程と, そこから得られる利潤率と賃金率との一義的な関係式の意義を明確にしたかったからであろうと評者は考えている. ともあれ, 利潤率と賃金率の決定-被決定の関係は, スラッファとスティードマンでは正反対になっているのである.

VII

われわれは *Marx after Sraffa* を, その前半を中心にみてきたが, そのなかには小稿で十分紹介することができなかった多くの興味深い分析がある. それらは, 評者の小稿でのスティードマンに対する批判とは別に, 独自の意義を持っている. これまでの批判によって決してその意義を失うものではない. むしろそれ自体さらに発展させられるべきであろう. ただその場合, 問題は, スティードマンもその意義を認めている唯物論的な社会・歴史・経済分析とどう関連するのか, コンシステントな理論体系として統一的に展開で

24) ドミトリエフとスラッファの同一性と差異性にかんしては, 山下博「ドミトリエフのリカードウ論」『甲南経済学論集』第14巻第2号, 昭和48年9月, 参照.

25) 利潤率は「生産の体系の外部から, とくに貨幣利子率の水準によって決定されることが可能である」(Sraffa, *op. cit.*, p. 33).

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

きるのかどうかである.[26]

(1979・3・25稿)

〔付記〕*Bulletin of the Conference of Socialist Economists* の利用にかんして水田洋（名古屋大学），本多健吉（大阪市立大学），大津定美（龍谷大学）の各先生方のお世話になった．この場をかりて改めてお礼を申し上げたい．

26）本書の書評として評者の知るかぎりつぎのものがある．L. Mainwaring, *The Manchester School*, September 1978, pp. 305～307；Heinz D. Kurz, *Kyklos*, Vol 31, Fasc. 4, 1978, SS. 736～738；白銀久紀，前掲論文；John E. Roemer, *Science and Society*, Vol. XLIII, No. 1, Spring 1979, pp. 95～99.

NII-Electronic Library Service